



先生がつながる

子ども同士のつながりをつくるために、まずは先生がつながりましょう。



Q1

「先生がつながる」仕組みづくりのために、何から始めたらよいですか？

A1. 管理職のつながりがスタートになります。特に、小学校の校長が調整役となって進めてみてはどうでしょうか。園と小学校の管理職同士のつながりができたら、それぞれ連絡窓口となる担当（保幼小連携担当、園務・教務主任等）を決め、何ができるかを話す場を設定しましょう。まずは「お互いの顔が分かるつながり」をめざすことから始めませんか。

中学校区内にある園、小・中学校の管理職、担当校の教育委員会の指導主事が月1回、連絡会を行っている市町の事例もあります。



Q2

5歳児クラスや1年生の担任が進めるものですか？

A2. 連携の推進役は5歳児クラスや1年生の担任になることが多いですが、全教職員で推進していきましょう。いろいろな年齢・学年が交流することで、連携はみんなで推進するという意識が高まります。保幼小の先生が対話する機会が増えることで、それぞれの教育・保育の特性や先生方が大切にしていること、例えば、幼児教育・保育では「生活や体験を大切にする」「子ども一人ひとりを丁寧に見る」、小学校教育では「系統的に学ぶ」といったことを知ることができます。これは、それぞれの教育・保育の改善に生かすことができます。



Q3

園と学校では、なかなか時間が合いません。どのようにしたらよいですか？

A3. 日常的に交流できる体制づくりと様々なツールの活用を意識してみましょう。保幼小連携は時間調整が難しいです。まずは、人間関係づくりを大切に、教職員同士が積極的に日常的な交流を積み重ねましょう（参観や散歩など）。打合せも、時間が限られているので、電話やメール、オンライン会議システムなどを活用して効率よく行うとよいでしょう。また、交流活動を行う際には、年度末に計画し、次年度の行事予定に入れておくのも有効な一つです。



Q4

（離島やへき地など）小学校区内に園がなく、架け橋期（5歳児・1年生）に該当する園児・児童がいません。どのように取り組んだらよいですか？

A4. 地域の実情に合わせて取り組みましょう。架け橋期に該当する園児・児童が在籍していない場合でも、県や市町が主催する保幼小連携研修会や連絡協議会に参加することで、園と小学校の教職員がつながったり、連携に関する情報交換を行ったりすることができます。架け橋期の園児・児童が在籍するようになった時に、「いつでも・誰でも」進められる体制づくりをめざしましょう。



園だより・学校だよりの 活用法は？

A5. おたよりは連携推進の大きなツールです。互いに交換するだけでも、園、小学校がどのような取組をしているのかを知ることができるだけでなく、子ども同士の交流の始まりにもなります。

例えば、

- ①小学校で運動会があることを知る。
- ②小学生がかけっこをする姿を園児が見る。
- ③園の遊びの中でかけっこが広まる。

園児が校長室に「おたよりゆうびん」を届けている園もあります。

また、おたよりを共有する際、回覧以外にも、定位置にコーナーをつくる、目に付きやすいコピー機の前に掲示する等の工夫をするとより効果的です。



保育参観・授業参観では、どのような視点でどのような場面を見るとよいのでしょうか？

A6. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を視点にして参観すると、子どもの姿を共有しやすくなります。

保育では、自由遊びで遊び込んでいる場面、集団で何かに取り組んでいる場面などを見ると、園児の様々な姿を見取ることができ、理解につながります。給食(お弁当)、片付け、手洗いやトイレ指導なども小学校とのつながりが見えてよいです。

授業では、はじめは、保育内容とのつながりが見えやすい生活科、体育科、特別活動などの教科を参観場面として設定するとよいでしょう。

教科だけでなく、給食、掃除、朝・帰りの会といった生活場面の様子を参観するのもおすすめです。



STEP 1

「先生がつながる」事例

市の取組 はじめての研修会

行政が背中を押す「はじめてのいっぽ」 ～先生同士がつながろう～

- ①執筆者の所属：保育主管課
- ②参加人数：34人
- ③市内の園、小学校数：12園、11校
- ④連携の現状：市主催の研修会を初めて開催しました。
- ⑤執筆者の一言：行政によるコーディネートで連携をスタートしました！！

1 ねらい

- 市内全ての園と小学校を対象とした保幼小連携の研修会を開催することにより、連携の必要性について共通認識をもち、各地域の実情に応じた連携の方法を考える。
- 市内全ての園と小学校の先生が集まり、他の園や学校で取り組んでいる好事例を参考にすることで、今後の連携に生かせるようにする。

2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

- 園（12園） 園長、5歳児クラス担任（計21人）
- 小学校（11校） 校長・教頭などの管理職及び1年生担任（計13人）
- 行政機関 教育委員会担当者、☆保育主管課担当者

3 時期

2学期の前半 午後の時間帯

園の先生方が集まりやすいとの意見があり、午後に開催しました！

4 内容・時間

(1) 講義（90分）

乳幼児の育ちと学び支援センターの幼児教育アドバイザーによる保幼小連携に関する講義を通して、共通認識をもつ。

詳しくはこちら→



(2) 事例紹介・グループワーク（70分）

市内を3地域に分け、主に園からの事例紹介をもとに協議・演習を行う。

(3) 振り返り・質疑応答（15分）

事例紹介・グループワークにおける気付きや感想を整理し、今後の具体的な連携方法について相互に意見交換を行う。必要に応じて幼児教育アドバイザーから連携のヒントについて提案を受ける。

5 取組を充実させるためのポイント

- 市内全ての園と小学校から参加してもらえるように、教育委員会と保育主管課が一体となり、相互の調整を図りながら研修会を開催する。
- クラス担任だけではなく、園長や校長・教頭等の管理職にも参加を促すことで研修内容を園内、校内にもち帰り、保幼小連携の共通認識をもつことができるようにする。
- 校区の枠を超えたグループワークを行うことにより、日頃交流の少ない園や学校の事例を情報共有できるようにする。

校区シャッフル型で行うことにより、新たな視点に気付いたり、発想を広げたりすることができ、取組への刺激にもつながります！

STEP 1

6 取組の実際

乳幼セのアドバイザー等訪問事業を活用することで、講義の調整がスムーズになります。

(1) 講義

乳幼児の育ちと学び支援センターの幼児教育アドバイザーから「保幼小連携で大切なこと」をテーマとし、取組の現状や連携を行う際の課題解決の方策などについて講義を受けました。園と小学校との知識・認識・文化のギャップを埋める工夫が必要であり、何よりも子どもを主体として考え、連携に取り組むことが重要であることを再認識できました。子どもを主体とした連携を進めるためには、「子どもが不思議に思ったことに共感する」「学ぶことが楽しいと思える心を育む」といった視点をもつことが重要であると改めて実感することができました。

(2) 事例紹介・グループワーク

園からは、「興味のある遊びを通して育っている力」について、取組内容の紹介がありました。ある園の事例では、ヘビに興味をもった子どもがおり、そこから「世界にはどんなヘビがいるの?」「ヘビの長さはどのくらい?」といった疑問が生まれ、実際にみんなで種類を調べたり、長さを再現したりすることで、協同性や数量への興味関心につながったことが紹介されました。小学校の先生からは、「園での遊びが算数科や理科など、小学校での様々な学習につながっていることが改めて実感できた。」との声が挙がっていました。



小学校の先生に、取組の様子が分かる写真を実際に見てもらうことにより、園の「ねらい」を理解してもらうことにもつながりました。

(3) 振り返り・質疑応答

事例紹介での小学校の先生からの反応を受け、園の先生からは、「小学校での授業の様子を実際に見て、今まで以上に連携を意識して取り組みたい。」といった意見が出ました。市内全ての園と小学校の先生が集まることで、顔の見える関係ができて、お互いの距離が縮まり、今後の具体的な連携に向けての土台となりました。

また、幼児教育アドバイザーから「就学後に小学校と卒業した園とを柔軟に行き来できるような環境を整備するなど、小規模な自治体だからこそできる新しい連携の在り方を考えてもよいのでは?」との提案もありました。これまでの形にとらわれずそれぞれの地域の実情に合った、新しい連携の在り方を考えるきっかけにもなりました。



研修後に実施したアンケートには、園の先生からは、「小学校との距離が近くなり連携が取りやすくなった。」、小学校の先生からは、「保幼小の連携がスムーズに進むように、行事や生活科などの学習を通じて一緒に活動するなど子ども同士の関わりをもてるようにしたい。」などの意見があり、今後は、より具体的で継続性のある連携への取組が必要であると感じました。

来年度以降は、カリキュラムの作成や小学校からの園訪問などを進める予定です。

STEP 1

「先生がつながる」事例

気軽に いつでも

見て、来て、感じて、つながろう

- ①執筆者の所属：保育所
- ②園児数：150人
- ③連携校数：1校
- ④連携の現状：年数回交流しています。
- ⑤執筆者の一言：垣根を低くして、交流できる機会を作るにより、連携しやすい関係が構築できます。

1 ねらい

- 子どもたちが園でどのような生活を送っているのかを直接見るにより、幼児期の育ちや保育についての理解を深める。
- 先生同士が直接語り合うことにより、顔の見えるつながりをつくり、子どもの育ちを共有するとともに、なんでも聞き合える関係づくりを行う。

2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

園

所長、☆主任保育士

校長、教頭（2人）、1年生担任（5人）
他学年の担任や特別支援学級の担任等（4人）

小学校

3 時期

小学校の夏休み期間

日程に幅をもたせると、小学校の先生の参加率が高まります。

4 内容・時間

- 参加者の都合に合わせて、順次見学を行う。（目安の時間 10:00～12:00の間）
- 園内を所長や主任が案内しながら、園の様子を紹介する。
- 見学だけでなく、保育に参加することも可能。

一方的に話すのではなく、対話型で説明すると小学校の先生から質問が出やすくなります。

5 取組を充実させるためのポイント

- 連絡会等の既存の機会を生かして、管理職が意思の疎通を図り、土台づくりをしておくこと、その後の活動の計画が立てやすく、スムーズに準備を進めることができる。
- 小学校の先生が参加しやすいように、時間や日にちにゆとりをもたせる。
- 形式にこだわらずに垣根を低くし、互いの情報を伝え合うことに焦点を当てる。
- 参加者が見たいところに行き、聞きたいことを聞き、知りたいことを知ることができるように、ウェルカムな雰囲気づくりを行う。

保育に直接参加したくなる機会や雰囲気づくりをすると、小学校の先生が子どもや園の先生の思いを理解しやすくなります。

STEP 1

6 取組の実際

(1) 打合せ

6月中旬に本市が行っている保幼小連携ブロック連絡協議会があり、その中で校區別連絡会がありました。コロナ禍で途絶えてしまっている交流の在り方などを検討し、今年度から行えそうな内容を挙げていきました。内容は、「授業参観&前年度担当との連絡会」「運動会や音楽会のリハーサル見学」「養護教諭や栄養教諭の話を聞く機会」「5歳児が1年生の授業見学」等です。またその中で、子どもたちの園での生活を小学校の先生方に知っていただく機会をもつように提案し、双方で調整を行うことを決めました。その後、7月中旬、園より見学可能な日を伝え、小学校側で調整を図りました。

(2) 園見学

園での保育の様子分かる「ドキュメンテーション」や0歳児からの「10の姿のつながり」、「園舎内の配置図」等の資料を用意し、当日に紙媒体として情報を提供しました。見学時は所長と主任が各年齢の保育室を紹介しました。また、子育て支援センターも併設しているため、地域との連携についても説明を行いました。特に5歳児クラスの様子を見学することができるように時間配分を考えました。

子どもたちの様子を伝える中で、保育や小学校教育の大変さ（特に保護者対応や、個別対応が必要な子どもへの配慮等）など互いの業務内容の見えない部分を共感し合うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

園生活でいろいろな経験をしていることを実感していただき、この経験をつなげていけるようにしていきたいとの感想も聞くことができ、嬉しく思いました。

(3) 振り返り

小学校から12名の先生方が参加していただき、保育に対する理解が深まったとの声を聞けたことは大変有意義でした。また直接子どもの様子や環境を見て、疑問点を確認したり、共通点を認識し合ったりすることにより、参加者同士、顔の見えるつながりがはっきりできたと思います。

しかし、遊びが中心の幼児教育と授業が中心の学校教育をつなぐ10の姿を共有することの難しさを感じました。

今後はさらにつながりを深めていくことができるように、グループを作って意見を交換したり、オンラインフォームなどを使ったアンケート形式で、見取った10の姿や感じたこと等を記入したりして、互いの視点を知ることができるとさらに連携が深まっていくのではないかと感じました。



STEP 1

「先生がつながる」事例

校内研修 授業参観

学び合おう！「保幼小連携」について

- ①執筆者の所属：小学校
- ②児童数：641人
- ③連携園数：4園
- ④連携の現状：年2回の合同研修会と授業参観を行っています。
- ⑤執筆者の一言：保幼小の先生が対話することで互いの教育及び保育をつなぐことができます。

1 ねらい

- 校区内の園と小学校の先生が直接顔を合わせ、対話をする場を設けることで、互いの教育及び保育について共通理解を図る。
- 小学校1年生の様子を知ったり、就学前の学びや育ちを共有したりすることで、子どもの心身の成長の過程について理解を深める。

2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

園

校区内保育所・幼稚園・認定こども園園長
クラス担任、クラス担任補助（計15人）

校長・教頭、教諭、養護教諭
☆保幼小連携の担当者（計35人）

小学校

3 時期

1学期から2学期にかけて

保幼小の先生が集まる機会を作ることが
大切です！

4 内容・時間

(1) 1学期【5月】(90分)

園と小学校の先生が一緒に研修を行い、保幼小連携についての実践を紹介し合い、意見交流する中で、互いが顔見知りになる。

(2) 小学校の夏休み(90分)

「入学から学校生活に慣れるまでの1年生の生活」について担任が話すことで、校区内の園の先生と小学校の先生が1年生の入学当初の学校生活の様子について共通理解を図る。

(3) 2学期【10月】(90分)

授業参観を通して、実際に園での学びが小学校での教育にどのように生かされているのかを考え、協議する。

5 取組を充実させるためのポイント

- 小学校区内に多数の園がある場合は、小学校側から「校内研修」への参加呼び掛けなどの発信があると集まりやすくなる。互いが顔見知りになった後、さらに研修内容を保幼小で検討したり、年度によっては研修の在り方を変えたりする（園側の話を聞く）などの方法を探っていくといい。
- 小学校の授業を参観する機会をもつことで、園の先生に子どもの成長を感じてもらおうとともに、園での学びがどのように小学校の教育に生かされているのか協議しながら理解を深めていく。

授業参観後に協議することで、お互いの教育及び保育について理解を深めることができます。

STEP 1

6 取組の実際

(1) 校内研修への参加

小学校は、全教職員が参加し、校区内の園の先生方は、園長や 5 歳児クラス担任を中心にできる範囲で参加しました。小学校は、1 年生担任を多く経験した先生もいれば、全く経験のない先生もいます。その中で、誰もが 1 年生を担当した時に、今までの子どもの成長をつなげられるように園での学びを知ることや、どのように保幼小が連携していかなければならないのか考える機会をもつことが大切です。そこで、保幼小連携担当の先生が、実践を発表する研修を行いました。



発表後は、小グループで園と小学校の先生と一緒に話をする機会を設け、日頃の悩みや、子どもの様子などを語り合うことで、先生がつながることができました。保幼小連携についての実践発表が難しいようであれば、1 回目の時に「入学してからの生活について」、2 回目に「幼児期の遊びを生かした授業について」など内容を変えながら行うこともできると思いました。

(2) 小学校入学から学校生活に慣れるまでの 1 年生の生活について

園の先生は、入学してから子どもたちがどのように過ごしているのか、知る機会がありません。入学してから学校生活に慣れるまでの様子を、スタートカリキュラムに基づいて、1 年生担任に話をしてもらい、その話を踏まえて小グループで意見交流しました。そこでは、小学校での課題や、園との環境の違いからくる子どもの困り感について共有したり、話をする中で互いの考えを知ったりすることなどができ、今後の取組について考えるきっかけとなりました。

(3) 授業参観・協議

2 学期には、国語科の授業を参観して、授業後に協議を行いました。「くじらぐも」の物語文の学習で、くじらぐもに乗って空を旅する中、どこに行くかや、何が見えたかを想像しました。「町ってどんなところ？言葉で説明できる？」という発問に、「家がいっぱいあるところ。」「電車が通っているところ。」など、町について子どもなりに考えたことを説明し、みんなが同じイメージをもつことができました。園でも振り返りなどを言葉で説明する機会がたくさんあります。自分の思いを言葉で表現する難しさが協議でも話題となりました。参観するだけでなく、協議も行うことで、今の子どもたちの課題について共通点が見えてくると感じました。

今回は授業参観をしましたが、小学校の先生が園に保育参観に行くなど、互いに行き来し、先生同士の交流が増えてくると、子どもの成長の過程の理解も深まってくると思いました。

くじらぐもの授業



授業後の協議

